離任の報告をしたメットカーフ少佐(右から2人目)と新指揮官のチャヴェズ大尉(右)

車力通信所指揮官にチャヴェズ大尉が就任

Xバンドレーダーを管理している米陸軍車力通信所の指揮官交代式が6月28日、航空自衛隊車力分屯基地で行われ、デイヴィッド・チャヴェズ大尉が新たな指揮官に就任しました。大尉はドイツのバウムホルダーからの着任で、ドイツでも指揮官として勤務していました。

交代式に先立ち6月20日、前任のヴィラック・メットカーフ少佐とチャヴェズ大尉が福島市長を訪問。ハワイへ赴任する少佐は「新指揮官に対してもこれまでと同様の温かい支援をお願いします」と話していました。福島市長は新指揮官に「北朝鮮をはじめ、様々な問題にも対応していただきたい」と伝えると、大尉は「一生懸命任務に邁進します」と答えていました。

児童と米軍人らが「かかし作り」で交流

東北防衛局が主催する「かかし作りプロジェクト2017 in つがる」が6月24日と25日、車力体育センターで行われ、車力小学校児童と米陸軍車力通信所の軍人らが、かかし作りを通じて交流を深めました。

初日は児童29人と軍人ら12人が6チームに分かれて参加し、稲垣藁の会（野崎克行会長）会員によるかかし作りの実演を見てから作業を開始。わらを棒に巻き付けて頭や胴体が出来上がると、各チーム思い思いの衣装を着せて個性を競っていました。6年生の西巻海晴君は「難しかったけど上手くできた。同じチームのサマーさんのアイデアが面白くて、みんなで楽しく作りました」と笑顔を見せていました。

協力してかかしを制作する参加者

南極の氷とふれあう児童と平川さん(左)

目標に向かって挑戦し続けよう

「南極観測船しらせ」初の女性乗組員である海上自衛隊海曹長の平川真由美さんが6月26日、母校の向陽小学校（七戸完三郎校長）で講話し、児童254人にエールを送りました。

講話では、南極の生物やオーロラ、しらせでの生活などを紹介。自身の体験をもとにチームワークや広い視野、目標を持って挑戦し続けることの大切さを伝え、「少しでも南極やしらせに興味を持ってくれたらうれしい」と話していました。また、平川さんから学校へ南極の氷が贈られ、児童たちは氷に耳を近づけてパチパチと気泡が弾ける音を楽しんでいました。6年生の木村瑠菜さんは「南極の厳しい気候などが分かりました。私も夢に向かってがんばろうと思います」と話していました。

恵まれた自然を守っていく　つがる地球村植樹祭

市観光物産協会(川嶋大史会長)が主催する植樹祭が6月23日、つがる地球村のオートキャンプ場で開催されました。

これは、緑化によりきれいなまちづくりを推奨しようと毎年実施しているもので、今年は同協会の会員と地元小学生ら約50人が参加しました。開会式では、森田小学校緑の少年団（4年生）の神丞之介さんと小田桐唯さんが「緑と親しみ緑を愛し、恵まれた自然を守っていきます」と宣言。植樹作業では、参加者が2人一組となり、つつじの苗木60本を手分けして丁寧に植えていきました。緑の少年団の工藤茅希さんは「きれいに咲いてほしいと願いながら、楽しく植えました。成長していく姿を見に来ます」と話していました。

植樹する福島市長と緑の少年団のメンバー

力を合わせ犯罪や非行のない社会を

7月6日、松の館で「第67回社会を明るくする運動」市民集会が開催され、市民ら約450人が犯罪や非行のない地域社会実現に向けた決意を新たにしました。

集会では、瑞穂小5年の古川大生君と對馬希実さんが「地域の方々と一緒に毎日を明るく生き生きと過ごせるようにします」と宣誓。社会を明るくする運動作文の発表では、瑞穂小6年の福士古都さんがコンテスト入賞作品を読み上げる姿が上映されました。福士さんは「犯罪・非行をなくす方法」と題して、毎朝のあいさつ運動を通じて学んだことを発表。「あいさつや友だちを土台にして、子どもの頃に社会のモラルを身につけることが必要」と来場者に伝えました。

誓いの言葉を述べる對馬さん(中)と古川君(右)

講話する精神保健福祉士の秋田谷さん

認知症支援を見つめ直す　キャラバン・メイト研修会

認知症の人やその家族を応援する認知症サポーターを育成するため、市内では専門の研修を受けた51人の「キャラバン・メイト」が活躍しています。7月11日、松の館でキャラバン・メイト研修会が行われ、キャラバン・メイトとして登録される介護支援専門員ら約30人が自分たちの役割を見つめ直しました。

研修会では、精神保健福祉士の秋田谷一さんが「今、改めて、キャラバンメイトとは」と題して講話。認知症になっても安心して暮らせるまちづくりに向け、地域の連携を深める役割を期待した上で「認知症の人の尊厳が守られる社会を作っていくことが大事」と話していました。参加者からは「地域で支える大切さをみんなに広めていきたい」などの声が出ていました。

遺跡PRへ向け市民ガイドを養成

つがる縄文の会（川嶋大史理事長）による亀ヶ岡石器時代遺跡と田子屋野貝塚の「ボランティアガイド養成講座」が7月19日、松の館を主会場に行われ、木造高校流通ビジネス系列の生徒を含む市民ら約30人が遺跡のPRへ向け理解を深めました。松の館では、県の岡田康博世界文化遺産登録推進室長が縄文文化の特徴などについて講演。「定住を達成し多様性の見本となる文化。世界遺産にふさわしい価値がある」と話していました。

この日参加した高校生11人は、8月19日に開催される亀ヶ岡遺跡まつりでガイドを務めます。3年生の奈良有沙さんは「縄文人の病気の治し方など知りたいことが増えた。自分たちでも調べてガイドに生かせれば」と抱負を話していました。

縄文土器の感触を確かめる参加者

追悼合唱を披露する童謡「蕾の会」のメンバー

不戦の誓いを新たに　戦没者追悼・平和祈念式

つがる市戦没者追悼・平和祈念式が7月20日、松の館で開催され、市民ら約150人が参列。この夏で終戦から72年を迎えるのを前に、戦没者を悼み恒久平和を誓いました。

式典では参列者全員で黙とうを捧げた後、倉光副市長が「悲惨な歴史を二度と繰り返さないとの決意を新たにし、恒久平和の確立に向け全力で取り組んでいきます」と追悼の言葉を述べました。市遺族会の工藤光則会長ら来賓の追悼の言葉に続き、参列者一人一人が祭壇に白い菊の花を手向け、戦没者の冥福を祈っていました。

また、童謡「蕾の会」による追悼合唱も行われ、平和への祈りを込めた歌が披露されました。